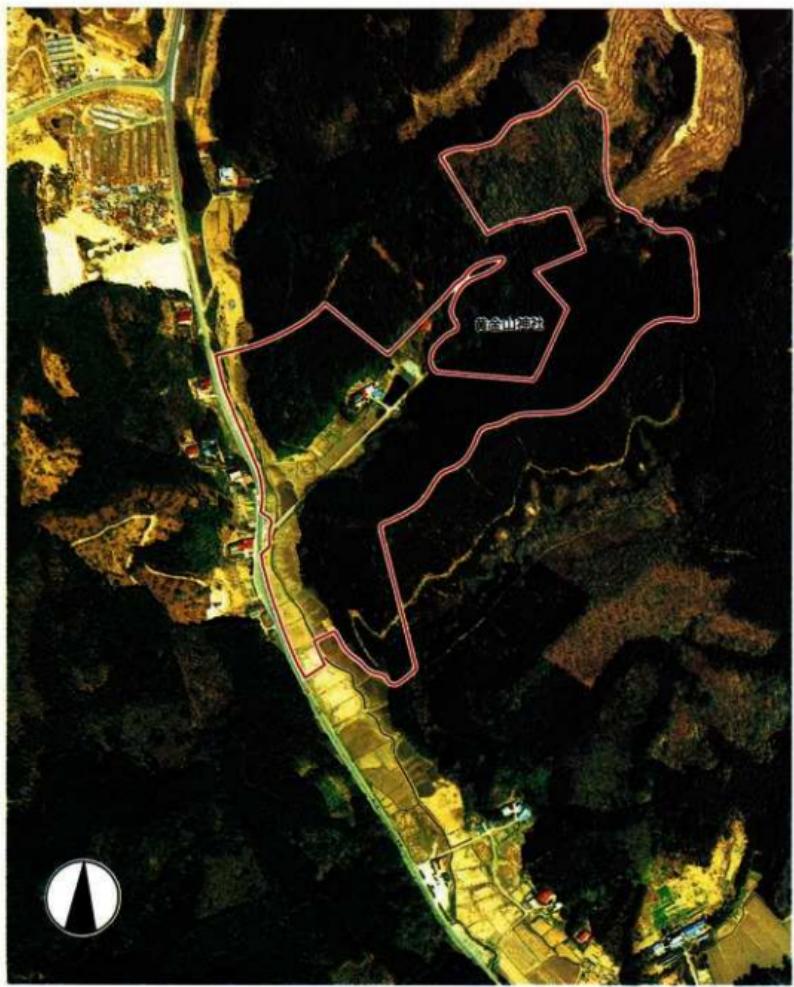


黄金山産金遺跡 黄金山南遺跡

—わくや万葉の里づくり事業に伴う発掘調査—





 町有地

0 300m
(1:4000)

道路周辺航空写真

黃金山產金遺跡 黃金山南遺跡

—わくや万葉の里づくり事業に伴う発掘調査—

序

本書にて報告する埋蔵文化財調査は、わくや万葉の里づくり事業に伴って実施されたものです。

この事業は、国史跡黄金山産金遺跡の保存整備と活用を目的とした町おこし事業で、歴史館・生産物直売所・砂金採り体験場・遺跡公園などを整備し、「わくや万葉の里」として、平成6年7月にオープンいたしました。

黄金山産金遺跡の試掘では、残念ながら遺構の発見には至りませんでしたが、黄金山南遺跡からは、平安時代の堅穴住居址1軒等が発見されました。黄金山南遺跡は、本事業の造成工事中に新たに発見された遺跡です。

調査の結果、黄金山南遺跡は調査区外へも広がる可能性を示し、遺跡と確認されていない範囲にも遺跡が分布していることが明らかとなりました。このことによって、当地一帯の歴史的環境を再検証する必要性が高まり、まさにこれから当地にて展開されようとしている、歴史施設事業にふさわしい課題を提起する結果となりました。

最後になりましたが、本事業の実施および本書の刊行において、ご援助いただいた皆様へ、謹んで感謝の意を表すると共に、今後も引き続き当町の文化財行政及び「わくや万葉の里」の運営において、ご指導、ご協力をお願い申し上げます。

平成8年3月

宮城県涌谷町教育委員会

教育長 木村 達夫

例　　言

1. 本書は、わくや万葉の里づくり事業に伴って平成4年～5年に実施された、国史跡黄金山産金遺跡とその隣接地における試掘調査、および黄金山南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査の調査体制は次のとおりである。

調査主体：涌谷町教育委員会

事務局：社会教育課

調査担当者：社会教育課学芸員 伊丹早苗

資料整理・本書の執筆・編集：同 上

3. 発掘調査・報告書作成にあたり、次の方々からご指導を賜った。記して感謝する。

宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館、
佐々木茂楨、小井川和夫、大沼恵美子、手塚均、丹羽茂

4. 本調査の測量については、X = -160388.24 Y = 26759.999を基準とし、発掘基準線
の北は第X系座標の北に一致する。

5. 本調査によって得られた資料、測量図面等は全て涌谷町教育委員会が保管している。

凡　　例

本書中の土器実測図は、断面を黒く塗り潰したものが須恵器、灰釉陶器、塗り潰していないものが土師器である。

目 次

I 調査の経過	1
§ 1. 遺跡の位置と歴史	1
§ 2. 調査に至る経緯	4
II 調査	10
§ 1. 平成4年度試掘調査	10
1. 調査要項	
2. 調査の経過	
3. 調査の結果	
§ 2. 黄金山南遺跡	13
1. 調査要項	
2. 調査の経過	
3. 調査の結果	
4. 考察	
§ 3. 平成5年度試掘調査	28
1. 調査要項	
2. 調査の経過	
3. 調査の結果	
III 調査のまとめ	37
写真図版	

I 調査の経過

§ 1. 遺跡の位置と歴史

遺跡の位置

今回の調査遺跡、国史跡黄金山産金遺跡と黄金山南遺跡は、涌谷町市街地より3km北東の、国道346号東沿いに位置する。

黄金山産金遺跡は、東西約400m、南北約100mに細長く伸びる。国道から東へ300m入ったところに、遺跡の中心である黄金山神社がある。沢沿いの平地部は狭く、神社の辺りで幅30mと狹隘な谷状地形となる。神社はこの沢より5~7mほど上の山の斜面を切り開いた平地に建っている。この神社境内とその周辺が、国史跡の指定を受けている。

黄金山南遺跡は、黄金山産金遺跡の南隣する山林部に位置するが、わくや万葉の里づくり事業中に発見された遺跡なので、造成工事範囲でしか確認されておらず、その全容は不明である。

古代の涌谷と黄金山神社

涌谷が小田郡と呼ばれていた奈良時代、平城京では、鎮護国家の名の元に東大寺が造営されていた。だがその本尊盧舎那仏に鍍金する金が不足し、大仏完成が危ぶまれていた。そこへ天平21年(749)、陸奥守百濟王敬福が小田郡で初めて金を発見し、900両を献上した。これによって年号が天平から天平感宝へ変わることとなり(1)、日本中を大きくわかせ、小田郡の砂金は大仏完成へと導いた。

さて、古代涌谷で金が採れた山に祭られていた神社、黄金山神社は、その後この国家慶事を象徴するかのように隆盛し、延喜式内社となった(2)。だがそれも11世紀の『水左記』(3)『帥記』(4)の記録を最後に文献上からしばらく姿を消す。

時代は下って、安永4年(1775)の『風土記御用書出』(5)に再び見える。そこではもはや小祠となつて、小金神明社と呼ばれていたが、まだ神主もいて、祭礼もとりおこなわれていたことが記されている。だが沖安海が黄金山神社を訪れ、『陸奥国少(小)田郡黄金山神社考』を著した文化7年(1810)(6)には、そこにはもはや荒れ果てた竹藪に礎石しか残っていなかつた。この35年の間に神社は完全に廃絶したらしい。おそらく砂金の枯渇がこのように神社を衰微させていったのであろう。現在の黄金山神社拝殿は、荒廃を嘆いた沖安海の寄進によって再建されたものである。

ところで前述の沖安海の記録にもあるのだが、神社境内からは布目瓦が出土することが知られている。そして昭和32年に行われた当地の発掘調査(7)によって、神社裏手(東側)から、瓦葺きの建物の痕跡が発見された。古代における瓦葺きの建物は、寺院か官衙に限られていたが、地勢上、この建物址は仏堂であったと推定された。年代は、当地から出土した瓦に「犬平口」とヘラ書されていたこと等から、初産金のあった奈良時代に比定された。

当時の調査は神社拝殿と、明治初めに増築された神殿の周囲のみの調査であったので、瓦葺きの建物址の全容も、現在の神社が古代と同じ位置に建てられているのか等も検証できなかった。また両者の関係も不明のままである。

黄金山神社に関する諸文献中、場所の特定に結びつけられるようなものはない。神社の場所に関して明確に言えることは、沖安海の寄進によって現在の黄金山神社が再建された、19世紀前半以降は現位置であったということだけである。しかし、土着信仰としての神社を、近世になってから遠隔地に再建することは考えにくい。また奈良時代の神仏習合の概念を併せて考慮すると、神社と仏堂が併設していた可能性が高い。しかも現在の神社が、古代の建物址とその基壇からわずかに離れて建っていること、瓦の散布地が神社拝殿にはあまりかかっていないこともそれを補完する根拠のひとつとなる。

かつて信仰を集めた神社と仏堂。黄金山産金遺跡は、ゴールドラッシュと鎮護国家に翻弄されながら盛衰した古代涌谷の廃墟と化して、ひとり神社のみがおごそかなたずまいをみせている。

黄金山産金遺跡

明治時代、黄金山神社周辺から「天平」二とへラ書きされた瓦が表面採集され、郷土史研究家の佐々木敏雄氏らによって、当地の重要性を指摘する声が高まり、昭和32年、東北大学の伊東信雄教授によって、黄金山神社境内の発掘調査が行われた(7)。

その結果、神社東側から建物の痕跡を示す板石が4基と多量の瓦が出土した。板石の上に据えられたはずの礎石は、原位置では発見されなかったが、現在の神社の礎石に転用されたと考えられた。出土した軒瓦は多賀城Ⅱ期、または陸奥国分寺創建期のものと酷似し、当遺跡はそれらとほぼ同時期(8世紀半ば)に比定された。この古代の瓦葺きの建物は、大仏建立の産金に関連したものと推定され、内藤政恒氏は産金を記念して建てられた仏堂(六角円堂)であった可能性を論じた(8)。

だが小田郡の黄金山神社と併設されたであろう古代の仏堂について追及した文献はなく、黄金山産金遺跡の全容は、現在の神社境内地内の未調査区域、及び神社よりさらに東側に谷を遡った区域の調査によって、一層明らかになるものと考えられる。

当遺跡はこのように歴史的重要性が確認され、昭和42年、国史跡に指定された。

(1) 初産金に関する主な記事は『続日本紀』天平21年2月22日、4月1日、2日、14日、22日等

(2)『延喜式』巻十「神名帳」

(3)『水左記』承暦4年閏8月5日条

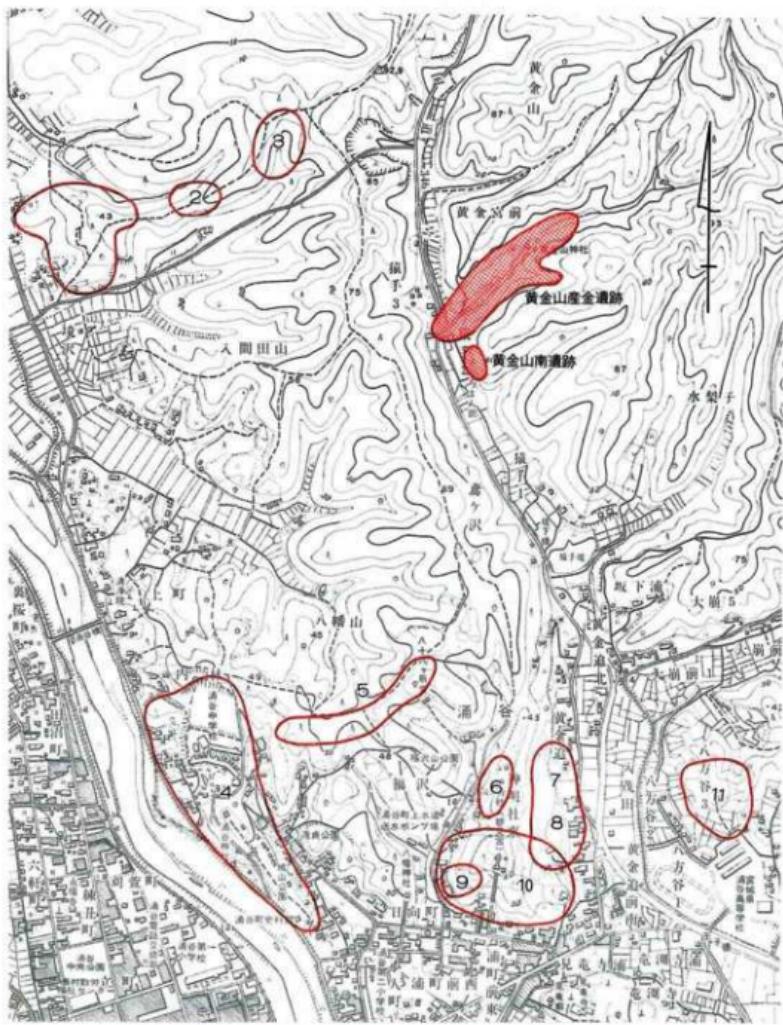
(4)『帥記』承暦4年閏8月5日条

(5)『風土記御用書出』安永4年、遠田郡涌谷村肝入久兵衛が落命により記録(宮城県図書館蔵)

(6) 沖安海 文化7年『陸奥国少田郡黄金山神社考』、文化11年『小田郡追考』(愛知県西尾図書館蔵)

(7) 伊東信雄 昭和35年『天平産金遺跡』

(8) 内藤政恒 昭和30年『天平産金地私考』(「南都佛教」第2号)



- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| 1. 塚沢貝塚 | 6. 福沢遺跡 | 11. 八方谷遺跡 |
| 2. 入間田山遺跡 | 7. 神明社東遺跡 | |
| 3. 寺山遺跡 | 8. 黄金迫遺跡 | |
| 4. 涌谷城跡 | 9. 日向町遺跡 | |
| 5. 城山裏土塁跡 | 10. 日向館跡 | |

第1図 調査遺跡と周辺の遺跡

§ 2. 調査に至る経緯

本書にて報告する3件の埋蔵文化財調査は、すべて「わくや万葉の里づくり」事業に伴う事前調査である。調査後は用地として造成された。

わくや万葉の里づくり事業概要

「わくや万葉の里づくり」は、ふるさと創生基金を元に実施された事業である。

涌谷は日本初産金の地であり、産出した金が東大寺大仏に鍍金されたという歴史があり、それに関連した遺跡、黄金山産金遺跡は国史跡に指定されている。当事業は、この歴史をテーマにした歴史館を中心に、地場産品を販売する生産物直売所、黄金山産金遺跡を整備した遺跡公園を建設するというものだった。総事業費は15億円にのぼり、平成元年～6年に実施された。

用地買収にあたっては、遺跡周辺を含めた景観保存という観点から、実際に工事の及ばない山林についても、広範囲に買収した。また遺跡内の事業地にあった民家1軒については、代替地確保により移転する了承を得た。

具体的な事業内容については、整備予定用地が、国史跡黄金山産金遺跡内にも及んだこと、この施設が単なる從来の町立資料館に止まらず、涌谷町の新たな町おこしの拠点ともすべく、多方面より検討を進めるため、国、県はもとより新たに設置した諸委員会においても、多くの協議が重ねられた。

その結果、歴史館等の中心施設は遺跡外の国道沿いに建設、黄金山神社の社務所跡には公園の管理施設を配置、神社の参道は車両進入禁止にし、公園内には遊歩道を設け、芝生や植栽、万葉集の歌碑を設置する整備が行われることになった。一方、史跡の中心である黄金山神社境内は、遺跡保存を考慮し、手を加えることを控えた。

事業に先立つ調査は2度の試掘調査と、造成工事中に発見された遺跡、黄金山南遺跡の発掘調査が行われた。

事業経過

1. 事業関係

平成元年 4月10日 ふるさと創生事業のアイデアを町民に募集

5月17日 町議会において、ふるさと創生事業として、史跡黄金山産金遺跡の整備を実施することに決定

7月4日 東北工業大学山田晴義教授に、当事業の基本計画の策定を委託

11月29日 学識経験者による「わくや万葉の里」整備委員会設置

平成3年 4月11日 新農村地域定住促進対策事業(農水省)指定

8月12日 展示計画専門家会議開催

12月21日 用地買収

平成4年 1月22日 わくや万葉の里づくり起工式

4月 1日 当事業の準備室「地域開発整備室」が企画財政課内に設置

5月 29日 地域づくり推進事業(自治省)指定

7月 25日 造成開始するが、遺跡発見のため工事の一時を中断

9月 1日 造成工事再開

平成5年 2月 1日 建物の建設、修景工事開始

平成6年 1月19日 万葉の里施設の愛称(「大平らまん館」とシンボルマーク)決定

4月 1日 わくや万葉の里管理運営団体「涌谷町地域振興公社」設立

6月 30日 全工事(展示を含む)の完了、引き渡し

7月 21日 わくや万葉の里オープン

2. 埋蔵文化財関係

平成4年 4月16日 黄金山産金遺跡及び隣接地における発掘調査の通知提出

5月11日～15日 第1回試掘調査

7月 25日 造成地での抜根中に遺跡発見(黄金山南遺跡)、工事を中断

7月 25日 黄金山南遺跡の発見通知

7月 29日～8月 23日 黄金山南遺跡発掘調査

8月 23日 黄金山南遺跡現地説明会

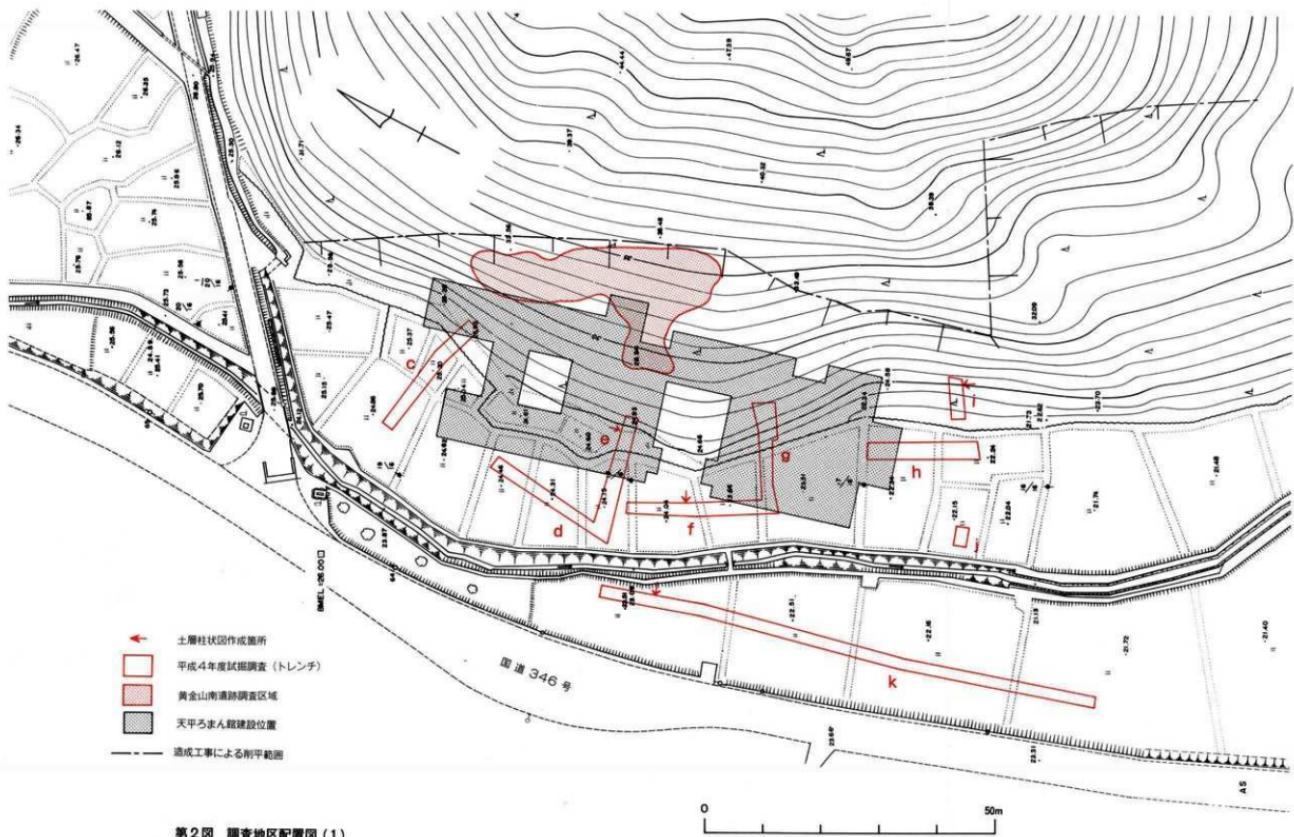
平成5年 4月 12日 国史跡黄金山産金遺跡の現状変更についての通知提出

6月 1日 現状変更の許可(整備事業)

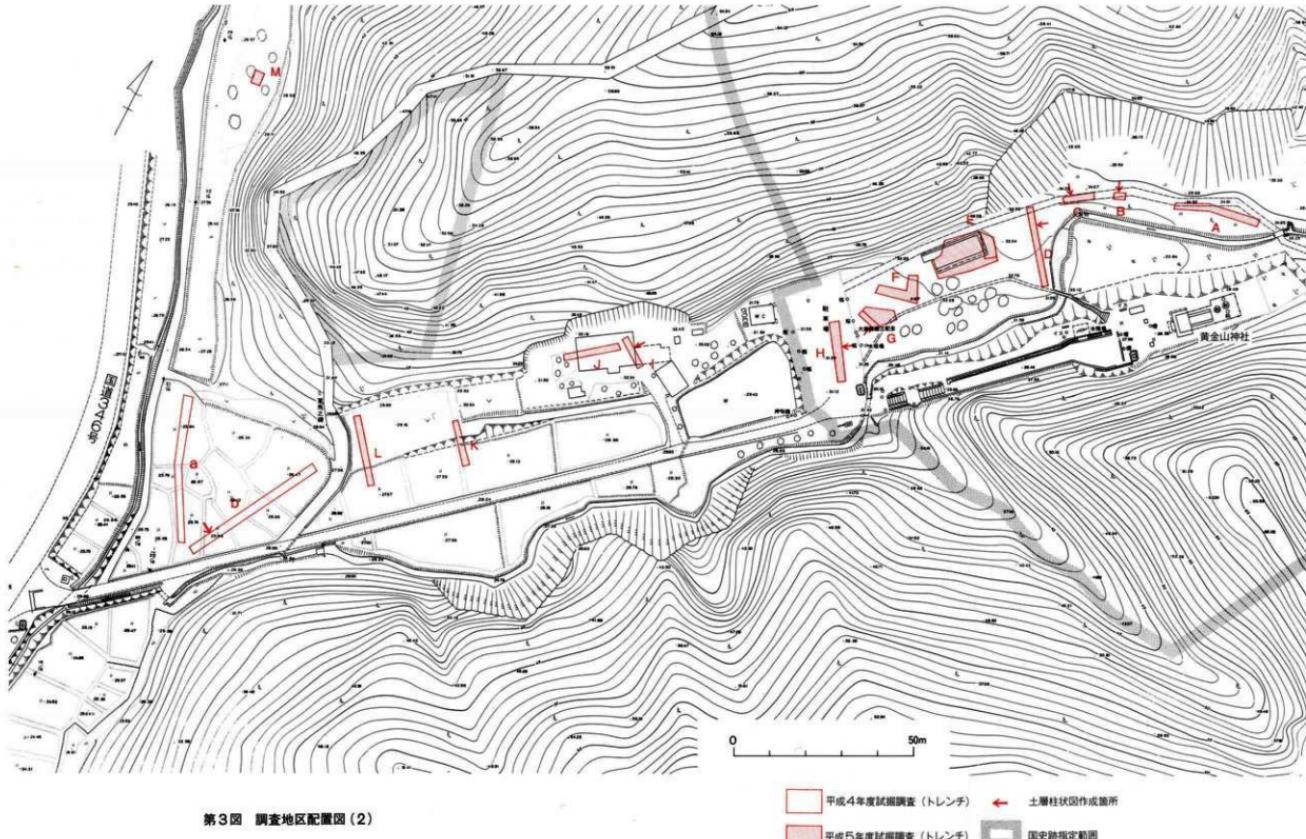
6月 4日 同上(発掘調査)

10月 22日～11月 24日 第2回試掘調査

12月 21日 埋蔵文化財の発掘調査終了についての通知提出



第2図 調査地区配置図(1)



第3図 調査地区配置図(2)

II 調査

§ 1. 平成4年度試掘調査

1. 調査要項

遺跡名 黄金山産金遺跡、およびその隣接地
所在地 宮城県遠田郡涌谷町涌谷字黄金山、猿手二、三地内
調査期間 平成4年5月11日～15日
調査対象面積 10, 200m²
調査方法 重機によるトレンチ掘削
調査協力者 小井川和夫(考古学、県文化財保護課)
大沼恵美子(地質学、宮城県涌谷高等学校教諭)

2. 調査の経過

平成4年5月11日 重機による掘り下げ
～15日 測量
(調査後は造成工事が行われるので、埋め戻しなし)

3. 調査の結果

遺構: なし
遺物: 瓦(a、dトレンチ)
土師器(d、i、j、kトレンチ)
須恵器(kトレンチ)
遺物はいずれも小片の上数点だったので、図化するまでには及ばなかった。

各トレンチ概要

山斜面を除けば、土砂はほぼ水平に自然堆積したものである。主なトレンチについては土層柱状図(図4)で示したが、各トレンチの所見事項は下記のとおりである。

- a トレンチ: 地山は北ほど浅いところで検出し、表土下20cmでグライ層になる。全体に腐食植物混入の粘質土。湧水が特に著しい。
- b トレンチ: 主にグライ化した腐食植物混入の粘質土で、部分的に砂質土層が入り込む。表土下40～50cm以下は砂礫層となる。

- c トレンチ：山際は表土下10cm程度で砂岩の岩盤。平地部分は表土下50cmで腐食植物混入のグライ化した粘質土層。約3m下で岩盤となる。湧水が特に著しい。
- d トレンチ：表土下10～20cmでグライ層。部分的に砂層が混入する粘質土。
- e トレンチ：山の部分は約60cm下で岩盤。主に砂質土層。平地部分では、岩盤は2.8m下。鉄分混入の粘質土。
- f トレンチ：地山は北部で表土下50cm、南部で10～20cm。部分的に砂礫土が混入する粘質土。
- g トレンチ：このトレンチは谷状地形にあるので、山部分も湧水著しい。30～40cm下でグライ化。鉄分の沈殿した青灰色土。
- h トレンチ：表土下20cmでグライ層。鉄分混入の粘質土。
- i トレンチ：岩盤まで上部で80cm。岩盤からの湧水著しい。表土下は多量の鉄分が沈殿した黒褐色土。
- j トレンチ：表土下30cmでグライ層。砂礫層混入の粘質土。
- k トレンチ：地山までは南は浅く、北は深い。南部に客土したと考えられる砂礫層が検出(南部は、標高が低いためか)。表土下30～60cmでグライ層。部分的に砂礫層が混入する粘質土。

所 見

トレンチは合計11本設定、調査したが、遺構の痕跡は全くなく、遺物も小片がわずかに出土したにとどまる。トレンチの深さは、数カ所で層位確認のため深掘りした以外は、地山である青灰色腐食土が検出した層で止めた。深掘り部分では、深さ約3m程度で岩盤となった。

水田部分に設定したトレンチは、いずれも表土下は腐食植物が堆積する湿地性土壤で、湧水が著しい。その下は砂質もしくは砂礫土と粘質土との互層で、最後は岩盤に当たる。

山斜面のトレンチでは、表土下まもなく岩盤となり、岩盤は水田部の下部へ入り込んでいる。岩盤からも湧水する。

土層は湧水のためのグライ化と、多量の鉄分の沈殿が見られることが、調査区全体に共通している。また金を含有する性質のある石英塊が数多く検出されたが、石英の礫層は確認できなかった。

遺物は、瓦、土師器、須恵器で、a, d, i, j, k の各トレンチから少量出土したが、すべて小片で実測するに足りないものばかりであった。

調査区全体に遺構は確認されず、遺物の流入もほとんどなく、「万葉の里」の事業推進にあたっては、問題のないことが明らかとなった。

bトレンチ

27.45m



eトレンチ

25.50m



fトレンチ

24.11m



iトレンチ

26.42m



kトレンチ

24.21m



第4図 主なトレンチの土層柱状図 (H4 試掘)

§ 2. 黄金山南遺跡

1. 調査要項

遺跡名 黄金山南遺跡
所在地 宮城県遠田郡涌谷町涌谷字黄金山地内
調査期間 平成4年7月29日～8月23日
調査面積 440m²
調査協力者 小井川和夫(考古学、県文化財保護課)
大沼恵美子(地質学、宮城県涌谷高等学校教諭)
調査参加者 柴明、田部新、安部忠衛、小関靖裕、安保純子、寺内一江、小山和哉
杉澤秀一、鈴木淳、柴村良逸、鈴木賢美、佐々木賢一、千田直哉、大橋宏高
小堤賢
(整理)芦田美保子、荒貴恵子

2. 調査の経過

平成4年7月25日 造成工事の抜根中に、遺物散布を確認。遺跡と判断し工事を中断
県文化財保護課に報告、発掘調査実施を決定

29日

{ 掘り下げ

8月14日

{ 測量

22日

20日 記者発表

23日 現地説明会

3. 調査の結果

調査の契機

造成工事は、天平ろまん館建設予定地と、それに隣接した、当事業の土地買収に伴う民家移転のための代替用地の2カ所で行われた。

このうち、表土に遺物混入を確認したのは、天平ろまん館用地の方で、急遽工事をストップし、調査を開始した。一方代替地では、傾斜もきつく、部分的に岩盤が露出する地山となり、遺物の出土も見られなかつたので、遺跡外と判断した。従つて以下に追及する工事とは天平ろまん館用地のことを指す。

遺跡の範囲

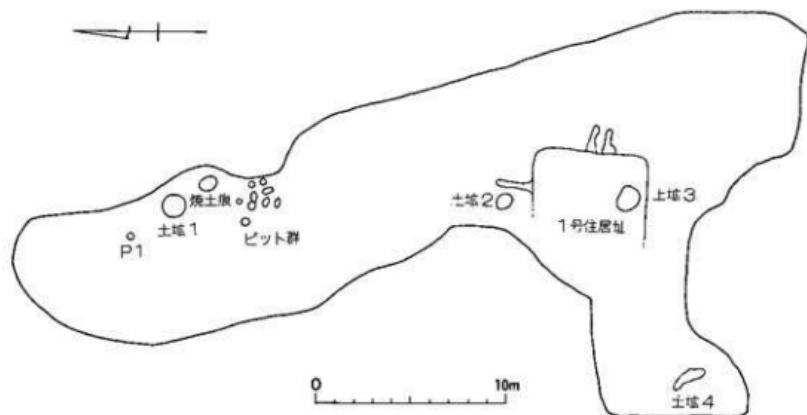
表土中の遺物は、調査区全体に分布したので検出を進めたが、殆ど表土下30~40cmで疊混入の黄褐色砂質土の地山になり、遺物も出土しなくなった。所々班点状の黒褐色土の分布が見られたので、大小13のレンチを入れたが、斜面に平行して自然堆積しており、遺構ではなかった。西側の斜面落ち込み際からも遺物は出土したが、新しい木材や杉葉が混入しており、客土と判断した。

発見された遺構は道路から約10m程標高の高い山の傾斜地に分布する。住居址は、舌状にせりだしている山の尾根の一端に位置し、そこは比較的傾斜のなだらかな広い場所である。遺構が住居址を含め、造成地東端に集中していることや、造成地は南へいくほど傾斜が増し、部分的に岩盤が検出し、遺物も出土しないことから、遺跡は少なくとも当地を南西端とすることが明らかであった。また遺構が発見されなかつたにもかかわらず、土器や瓦の出土をみた地点もあったことなどから、調査地の傾斜は急なので、上部から流出した遺物が表土中に混入したと考えられ、山の上方へ遺跡が続く可能性を強く示唆する。

発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は以下のとおりである。

竪穴式住居	1軒
土塙(直径60cm以上)	4基
ピット(直径60cm以下)	10基
焼土痕	1ヵ所



第5図 黄金山南遺跡調査全体図

1号住居址（第6、7図）

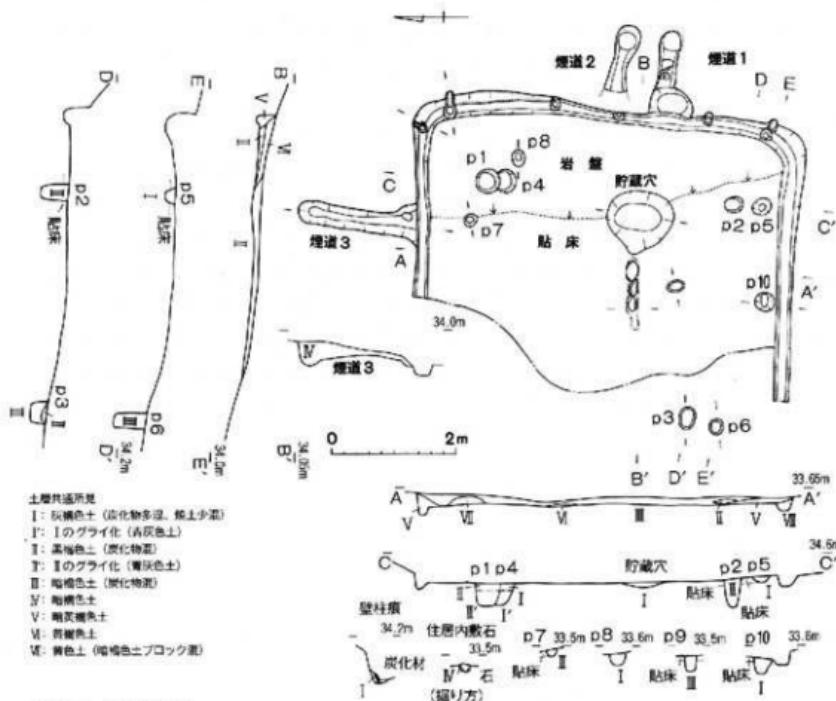
傾斜地に立地するため、西半分が削られているので東西の規模は不明だが、南北は6mある。四辺の壁はほぼ各方面に平行する。壁高は、最も残存良好な東側で40cm前後である。覆土は主に暗褐色土と黒褐色土でほぼ平行堆積しているが、ブロック状の塊が一部に見られる。地山が黄褐色土なので、非常に明瞭に検出した。

床には幅20cm、深さ7cm前後、断面形がU字形の周溝が巡らされ、東側一部の壁は前傾し被っている。溝の中は湧水のためグライ化し、南側ほど著しい。東側の周溝内には80～120cmの間隔で壁柱穴がある。壁柱穴は北及び南側の周溝では確認できなかった。床は東側1mが岩盤上にあり、西側は貼床で、最大で10cmの厚さがあった。貼床部分は、淡灰褐色砂質土で堅く叩き締められている。床面は1面のみ検出した。

住居内ピットは、10基発見され、そのうち6基が主柱穴と推定される。即ち3カ所で、柱穴が隣接して2基づつ検出しており、建て替えがあったと考えられる。4カ所目の主柱穴は、傾斜と攪乱が著しく発見できなかった。

住居中央部には貯蔵穴と見られる土塗が1基ある。その土塗の西に統いて石3個が縦長に並んで検出した。これらの石は、上面が平らで、縦20～30cm、横10～15cmの縦長いもので、掘り方を確認したので、意図的に埋設されたものである。簡仕切り用の礎石の可能性がある。

またこの住居からは、多量の炭化物や焼土が出土し、特に東壁の壁柱穴内には炭化材がそのまま残存していたので、焼失住居と見られる。炭化材は東側で特に数多く出土し、住居の検出段階から、東壁中央部を中心に、焼土や炭化物が顕著に見られた。一方西側は流出したためか、焼土は残存していたが、炭化材は少なかった。また貼床部分にも炭化物が混入していた。



第6図 1号住居址



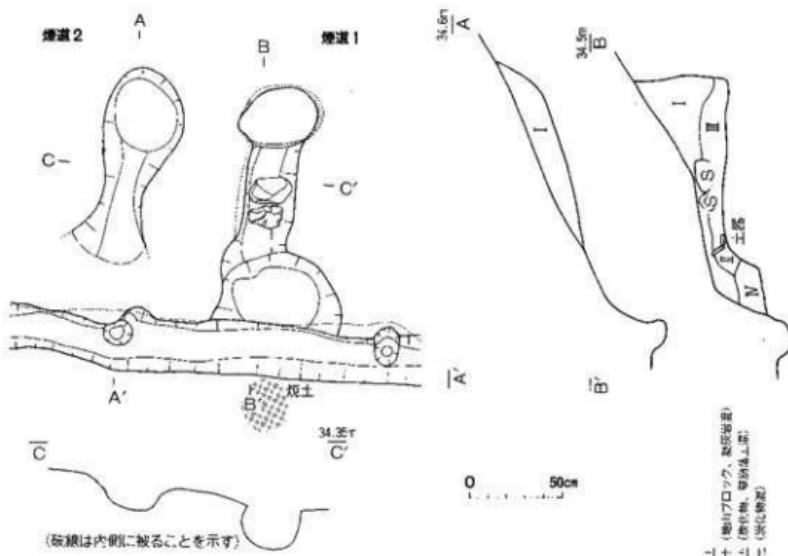
第7図 1号住居址遺物出土図

1号住居址カマド（第8図）

煙道は3基確認したが、いずれも燃焼部は残存せず、周溝に切られた状態で出土した。その内の2基は住居の東壁中央部付近に並んで出土し、もう1基は北壁やや東寄りにある。だが、この北側の煙道には、炭化物や焼土が見られない。

東の煙道のうち、北側の煙道2は、崩落が著しく約15cmの浅い掘り込みしか残っておらず、遺棄されて長いことを示し、少なくとも南側の煙道1より古い。またカマド正面に壁柱穴があるので、壁柱穴が塗かれる以前のものであろう。部分的に炭化物が残存する。

煙道1は、残存状況が非常に良好である。住居から段状に30cm上がったところで、1mほど水平に奥に伸び、そこから煙出し部が垂直に立ち上がる。奥壁は高さ50cm余り残存し、壁は焼けており、炭化物の付着も著しい。煙道からは、須恵器（第12図19）と石2個（内1個は被熱）が出土した。この煙道の壁面には、炭化物はあまり見られない。この煙道は住居の周溝に切られている。さほど風化は進んでおらず、カマド廃棄後長くないことを伺わせる。また周溝を隔てた向かいの床面には、焼土痕がある。カマドに伴うものとも見られるが、火災のためとも考えられ断定できない。



第8図 1号住居址カマド

遺物（第11～13図）

1号住居址から出土した遺物は、土師器、須恵器、灰釉、鉄器、砥石である。いずれも被熱していて、もろい。

1～12は土師器で、22を除き13～24は須恵器、22は灰釉である。これらはすべて主にロクロ成形だが、1～3、8、9、12、14、16、18、20の底部はヘラ切りで、その他の杯は回転糸切痕がある。

5は両黒の壺、11と12は一括で出土したが2個体となった。18は口縁外面に3カ所の短い刻線があり、23、24は須恵器甕で、23は無文である。

2～3個の杯が、床面上に伏せられた状態で重なって出土したものが2カ所で見られた（17、18、20と13、15）。そのうちの1つ（20）には、底部に墨書がある。被熱のためか墨がとんで、白っぽく字が浮き上がっている。何と書かれているのか、判読できない。

灰釉陶器（22）は破片が1点、覆土から出土した。

鉄器は床付近から2点（刀子（25）、鐵鎌（26））発見された。

砥石（29）は床付近で見つかり、全体に被熱痕が著しく、方形の3面で破損しているが、残存面3面にはすべて使用痕がある。最も広い面には5～7本の細い筋があり、先の尖ったものを研いた痕跡であろう。その両サイドの面は全面が研磨されていて、中央部がやや凹んでいる。幅広の刃の磨研用であろう。素材の石は白っぽい凝灰岩である。

1号住居址考察

焼失住居なので、床面上から多量の炭化材、焼土が出土した。そのうち壁柱穴内に残存した炭化材など、東側で残存状況が良好だった。それは東側が岩盤を掘り込んで作られているので、崩壊しにくかったことが原因であろう。西側は山斜面に面しているため崩落している。

2基づつ隣接した主柱穴からは、建て替えが推測される。切り合った主柱穴が1カ所あり、それによると北側が新しい。

カマドは、煙道が3基検出したにもかかわらず、いずれも燃焼部は残存しない。煙道2は残存状況や壁柱穴の位置などから遺棄されたと見られるが、1と3は周溝に切られているのか、燃焼部が崩落し煙道のみが残存したのか、判断しにくい。また3基のカマドをすべて廃棄したとすれば、削平されている西側に4基目のカマドが作られた可能性や、意図的にカマドを取り去って、住居以外の施設に転用した可能性なども考えられる。

遺物は底部回転糸切痕のあるものに混じってヘラ切後ナデ調整されたものが半分を占めた。墨書きされた須恵器杯、灰釉陶器、鐵鎌、刀子、砥石などが出土し、遺物量は多くはないが種類に富む。いずれも火災によるものと考えられる被熱痕がある。

住居の年代は、ロクロ成形、底部回転糸切痕のある土器などから、ほぼ9世紀後半に比定される。

土 塚 (第9図)

土塚は全4基発見された。土塚2以外は、遺物より1号住居址同様9世紀後半に比定される。土塚2は遺物の出土がないので年代不明である。

土塚 1 : (長径) 140cm × (短径) 115cm × (高さ) 20cm

調査区北側の焼土近辺にて検出。

遺物：須恵器壺。

土塚 2 : 75×70×20

1号住居址北側で出土。輪郭不明瞭で、崩れた土塚か。覆土には炭化物、焼土少量混入。

遺物：なし

土塚 3 : 130×105×25

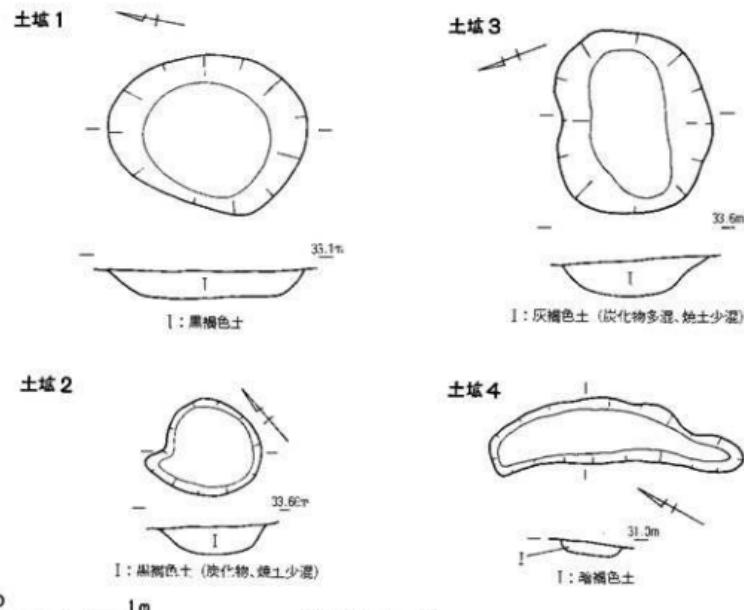
1号住居址内で検出。住居より古い。覆土には炭化物多量、焼土少量混入。

遺物(第14図)：内黒土師器壺(底部ヘラ切後ヘラケズリ)、土師器甕等。

土塚 4 : 180×47×10

半月形の不整形な土塚。

遺物：土師器。



第9図 土 塚

ピット群（第10図）

P1のみ離れているが、その他は集中して発見された。遺物もなく深さも浅いが、明瞭な輪郭を持つ。建物の柱穴とも成り得ず、用途や年代は判断できない。覆土はP1を除けば、いずれも同じ暗褐色土である。P1の上半部は削平もしくは搅乱のためか、上層に薄く黒褐色土層がある。

焼土痕（第10、15図）

ピット群の北に円形に検出された。この焼土は表土直下にあるが、すでに上面は削られて残存しない。焼土の深さは15cmで、平瓦、土師器、須恵器が出土地した。この焼土に伴う遺構は残存しない。

検出面の遺物（第13、15図）

土師器 坯、塊、蓋（41・両黒で胎土がグライ化して灰色を呈する）等がある。35は底部ヘラ切後ケズリが施されている。

須恵器 坯、壺等がある。34は底部ヘラ切後ナデ調整されている。

鉄製品 27は釘で、両端部が欠損している。1号住居址の南外で出土した。28も表土中から見つかった。断面が方形の釘状のものをV字に曲げてあり、V字の曲がった部分に茎部のあつた痕跡はない。意図的に曲げたものかどうかも含め用途不明品である。

瓦 平瓦が1点（46）出土している。上面は布目、下面是タタキ目が残る。これは表土に混入して発見された。

4. 考 察

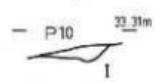
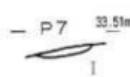
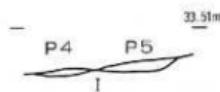
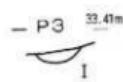
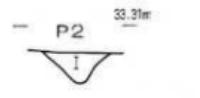
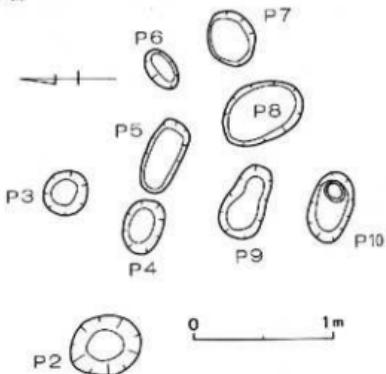
当遺跡の調査は、傾斜の急な山の斜面で、しかも植林された山であるため、表土を含めた上層の擾乱が著しく、検出に紛らわしい一面もあった。しかもその表土に数多くの遺物が混入していたので、なおさらであった。だが、表土を除去すれば、遺構の検出は比較的容易な遺跡であった。

住居址は、傾斜のきつい山の斜面に検出したので、斜面側は崩壊していた。だが涌谷周辺の他町の遺跡でも、山の急な斜面に住居址が発見されており（1）、集落は丘陵部に営まれていたと推定される。前年度の試掘で、現在水田となっている平地は、かつて湿地だったことが明らかとなっているので、集落として適さなかったと考えられる。

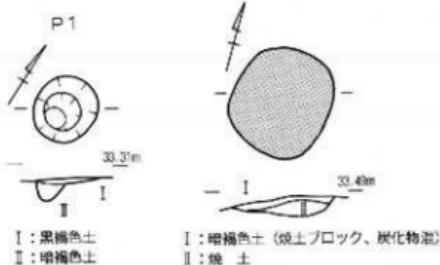
遺跡の年代は9世紀後半に比定される。この時期はまだ当地から金が採れていたと推定されることや黄金山産金遺跡の隣接地なので、産金に関連する資料の発見に期待を寄せたが、残念ながら今回は見送られた。だが表土や焼土痕に混入していた瓦は、上部の山林に、瓦葺きの建物の存在を暗示するものもあり、山林部へ続くと見られる遺跡の調査に期待される。

（1）田尻町教育委員会 昭和53年 天狗堂遺跡 河南町教育委員会 平成5年 須江窯跡群関人遺跡

ピット群

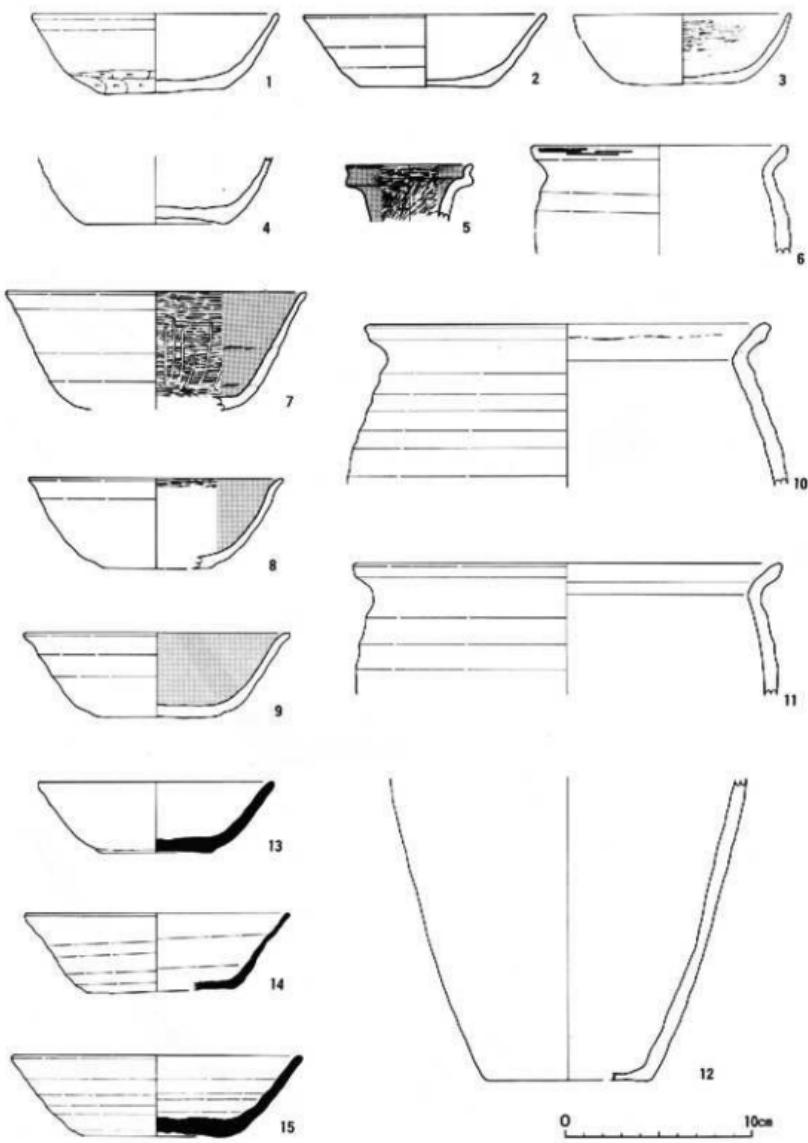


焼土痕

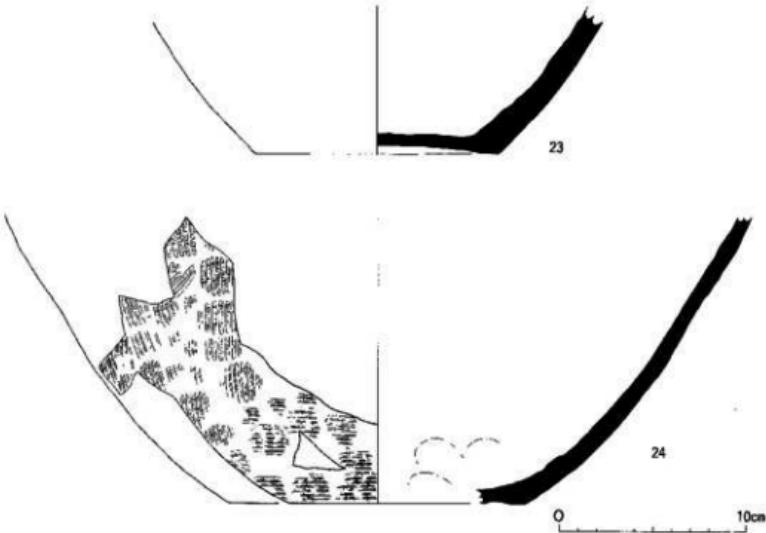
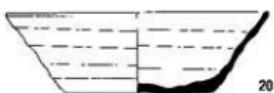


I : 黒褐色土
II : 増褐色土

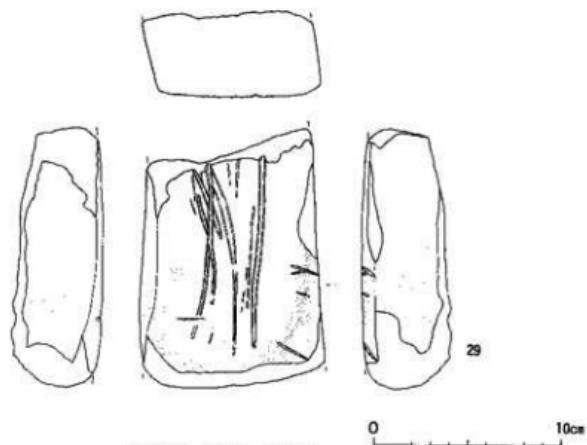
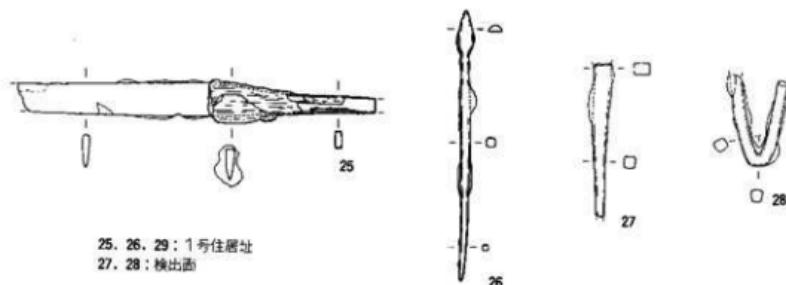
第10図 ピット群・焼土痕



第11図 1号住居址出土遺物（1）



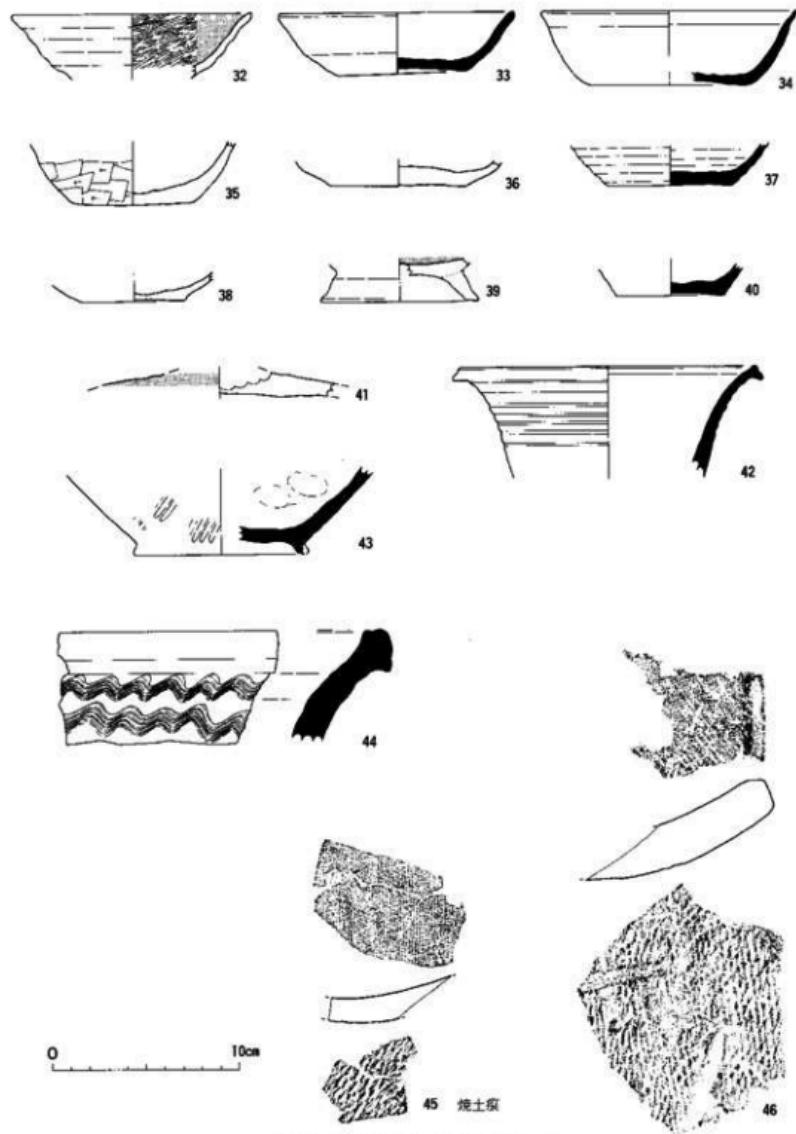
第12図 1号住居址出土遺物(2)



第13図 鉄器・石製品



第14図 土塹3出土遺物



第15図 検出面出土遺物(45を除く)

黄金山南遺跡出土遺物目録表

回数NO	種別	大きさ(cm)			色調		現存状況	成形・開閉・特徴		出土地点	備考
		口徑(幅)	底径(幅)	高	外面	内面		外	内		
1	土師器壺	13.2	6.4	4.3	棕褐色	棕褐色	口縫1/4、底部完	口縫1/4、底部1/3	口縫ナダ、外縫下部ヘタギ、底部ヘラ切痕ナダ	1住	東壁 被熱
2	土師器壺	13.2	6.9	3.8	棕褐色	棕褐色	口縫1/4、底部完	口縫1/4、底部1/2、底部完	口縫ナダ、底部ヘタギ後ナダ ⁹	1住	NO.13 風化
3	土師器壺	11.6	6.8	3.7	棕褐色	棕褐色	口縫1/4、底部完	口縫1/2、底部完	外縫ナダ、内縫ヘラガキ、底部ナダ	1住	西外 被熱
4	土師器壺	-	7.3	-	暗褐色	暗褐色	口縫6/7	口縫1/2ナダ、底部軸合切痕	口縫ナダ、底部軸合切痕	1住	クサ土 被熱、風化
5	土師器壺	6.8	-	-	黒色	黒色	口縫1/4	口縫1/4	口縫ナダ	1住	東壁 西黑
6	土師器壺	13.8	-	-	黃褐色	黃褐色	口縫4/5	口縫4/5	口縫ナダ、口輪外面ガキ目状ナダ	1住	NO.19 被熱、風化
7	土師器壺	16.1	-	-	黃褐色	黒色	口縫1/5	口縫1/5	内縫ヘラガキ、外縫下部軸合切痕カロナダ	1住	NO.2 内風、被熱、風化
8	土師器壺	13.6	6.7	4.8	棕褐色	黒色	口縫1/6、底部少々	口縫1/6、底部少々	口縫ナダ、内縫ヘラガキ、底部ヘラ切痕ナダ	1住	東壁 内風、風化
9	土師器壺	14.2	6.8	4.5	褐褐色	黒色	口縫1/3、底部完	口縫1/3、底部完	口縫ナダ、内縫ヘラガキ、底部ヘラ切痕ナダ	1住	東壁 内風、風化
10	土師器壺	21.7	-	-	黄褐色	暗褐色	口縫1/6	口縫1/6	口縫ナダ、外縫隙合状化物付着	1住	NO.14 風化
11	土師器壺	23.0	-	-	暗褐色	暗褐色	口縫1/6	口縫1/6	口縫ナダ、底部ナダ	1住	NO.9 内縫隙合状化物付着
12	須恵器壺	-	8.7	-	黄褐色	黄褐色	底部1.5	底部1.5	口縫ナダ、底部軸合切痕	1住	NO.12B 生焼、被熱
13	須恵器壺	12.6	6.3	3.8	黄灰色	黄灰色	口縫1/4、底部1/2	口縫1/4、底部1/2	口縫ナダ、底部軸合切痕	1住	NO.14 被熱
14	須恵器壺	14.1	7.9	4.3	淡灰褐色	淡灰褐色	口縫2/3、底部軸合切痕	口縫2/3、底部軸合切痕	口縫ナダ、底部軸合ヘタギ後ナダ	1住	NO.4 被熱
15	須恵器壺	15.5	7.7	4.3	黄灰色	黄灰色	口縫1.3、底部4/5	口縫1.3、底部4/5	口縫ナダ、底部軸合切痕	1住	NO.12A 生焼
16	須恵器壺	-	6.4	-	灰色	灰色	底部完	底部完	口縫ナダ、外縫下部軸合カタツリ、底部凹長ヘタ切	1住	NO.13 被熱
17	須恵器壺	13.5	6.0	3.8	黄灰色	黄灰色	元形	口縫ナダ、底部軸合切痕	口縫ナダ、底部軸合切痕	1住	NO.1A 生焼、被熱
18	須恵器壺	13.4	8.1	4.3	淡灰褐色	淡灰褐色	口縫完形	口縫完形	口縫ナダ、底部軸合ヘタギ後ナダ	1住	NO.1B 生焼、被熱
19	須恵器壺	13.1	6.1	3.9	灰色	灰色	口縫3/4、底部完	口縫3/4、底部完	口縫ナダ、底部軸合切痕	1住	解道1 ゆがみ
20	須恵器壺	14.0	7.9	4.3	灰褐色	灰褐色	口縫完形	口縫完形	口縫ナダ、底部軸合ヘタギ後ナダ	10住	NO.1C 生焼、底部に墨書き
21	須恵器壺	13.2	6.0	3.5	黄灰色	黄灰色	口縫3/4、底部完	口縫3/4、底部完	口縫ナダ、底部軸合切痕	1住	NO.5 生焼、口縫端部付着
22	民陶器器	15.2	-	-	黄灰色	黄灰色	口縫1/12	口縫1/12	口縫ナダ、外縫下部軸合ヘタギ後ナダ	1住	クサ土 上
23	須恵器壺	-	13.0	-	暗灰色	暗灰色	底部3/4	底部3/4	金輪ナダ、外縫下部ケツグ	1住	東壁 自然釉
24	須恵器壺	-	15.7	-	暗灰色	暗灰色	底部1/6	底部1/6	外縫タキ目、内縫当直具、底部ヘタギ後ナダ	1住	東壁 被熱
25	鉢(7寸)	-	-	-	-	-	-	-	斜窓部欠損 斜窓マチ	1住	NO.6

試験NO.	種別	大きさ(cm)		色調		残存状況		成形・調整・特徴		出土地点	備考
		口径(奥)	長径(奥)	高(奥)	外面	内面	端部欠損	端部欠損	3面欠損		
26	鉢(灰褐色)	14.5	0.9	0.5	—	—	はぼ完	はぼ完	—	1住 草壁	自然
27	鉢(赤)	—	—	—	—	—	両端部欠損	—	—	1住 間外	
28	鉢(不明)	—	—	—	—	—	—	—	—	検出面	
29	硯石	13.9	10.0	4.8	—	墨色	—	—	—	1住 NO.18	黒灰岩 斧削 内黑 研がみ
30	土師器壺	12.1	6.5	4.5	青褐色	墨色	口縁 1/4、底部 3/4	外側 ハセキアリ、内部 ラガリ、底部 ハセキアリ	底部光	土 3	
31	土師器壺	—	8.9	—	橙褐色	墨色	—	外側 ハセキアリ、内面 ロクロナダ、底部 ナダ	—	上 3	風化
32	土師器壺	12.4	—	—	黄褐色	墨色	口縁 1/8	ロクロナダ、内面 ハセキアリ	—	検出面	
33	須恵器壺	12.7	6.8	3.3	灰色	灰色	口縁 1/8、底部 1/3	ロクロナダ、底部 ハセキアリ	完形	検出面	妙がみ
34	須恵器壺	13.8	8.4	3.9	灰色	灰色	—	ロクロナダ、外側 下部 ハセキアリ、内部 ハセキアリ	—	検出面	外面 口縁に自然釉
35	土師器壺	—	6.6	—	黄褐色	黄色	底部光	—	—	検出面	
36	土師器壺	—	7.2	—	灰褐色	墨褐色	底部光	ロクロナダ、外側 下部 ハセキアリ、底部 ハセキアリ	—	検出面	被熱、底部に黒斑
37	須恵器壺	—	6.1	—	灰色	灰色	底部 1/2	ロクロナダ、底部 回転釉 切痕	—	検出面	
38	土師器壺	—	5.6	—	黄褐色	暗褐色	底部光	ロクロナダ、底部回転釉 切痕	—	検出面	被熱
39	土師器壺	—	8.4	—	黄褐色	黑色	高台 1/3、底部 1/3	ロクロナダ、内面 ハセキアリ、底部回転釉 切痕、付高台	高台	検出面	内黒
40	須恵器壺	—	5.8	—	灰色	黑色	底部光	ロクロナダ、底部回転釉 切痕	—	検出面	
41	土師器蓋	—	—	—	黑色	黑色	漏筋、つまみ火痕	漏筋、ハセキアリ	—	検出面	此物にシャール状のもの付着
42	須恵器蓋	—	16.6	—	灰色	灰色	口縁 1/8	ロクロナダ、外正輪裏に凹輪状のナダ	—	検出面	同上、クラゲ化、新ナガ灰色
43	須恵器蓋	—	—	9.3	灰色	灰色	底部 1/4	ロクロナダ、外曲タタキ口、内面 当身身板、付高台	—	検出面	外面部、見山張一日然繪
44	須恵器蓋	—	—	—	—	—	—	ロクロナダ、外正輪裏に凹輪状のナダ	—	検出面	
45	平瓦	—	—	—	橙褐色	橙褐色	测定不可能	コクロナダ、外面 5本 25瓣 檻文	上曲もじ、下曲タタキ口	燒土質	生焼
46	平瓦	—	—	—	橙褐色	橙褐色	测定不可能	—	1面有目、下曲タタキ口	検出面	生焼

§ 3. 平成5年度試掘調査

1. 調査要項

遺跡名 黄金山産金遺跡
所在地 宮城県遠田郡涌谷町涌谷字黄金山、猿手二、猿手三地内
調査期間 平成5年10月22日～11月24日
調査対象面積 10,600m²
調査方法 重機によるトレンチ掘削
調査協力者 小井川和夫(考古学、県文化財保護課)
調査参加者 桜井道子、相沢絹子

2. 調査の経過

平成5年10月20日 旧黄金山神社社務所の解体
22日
／ 重機掘り下げ、測量
11月24日

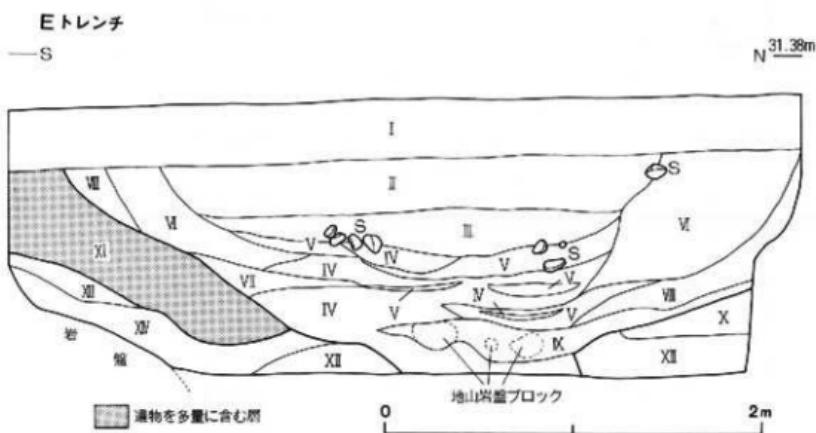
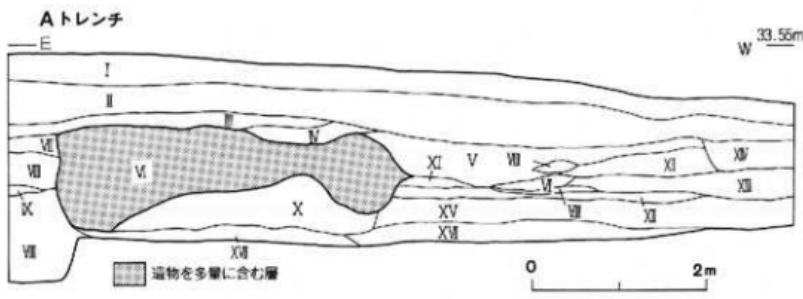
3. 調査の結果

遺構：なし
遺物：軒丸瓦1点(Aトレンチ)
軒平瓦2点(Aトレンチ)
平瓦、丸瓦(A、C、E、Iトレンチ)
土師器(A、C、E、H、Gトレンチ)
須恵器(A、C、E、H、Gトレンチ)
鉄器(Eトレンチ)

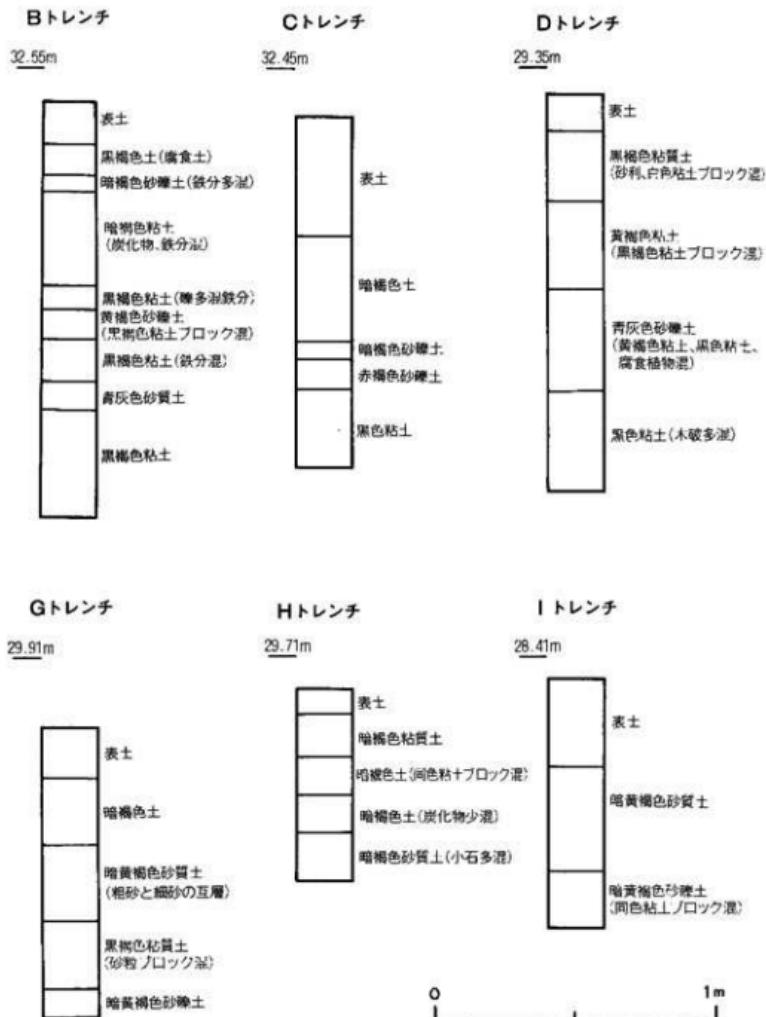
各トレンチ概要

Aトレンチ（第16図）：トレンチ最東の表土下80cmに、自然流路と見られる砂疊層(VI層)があり、そこから軒瓦を含む多量の瓦が出土した。この流路は東西4m程度で、南北方向に伸びる。北側の山斜面は緩い沢状地形になっているので、その延長と考えられる。出土遺物の多くが瓦で、土器は微量であることから、南側の黄金山神社裏手で発見された古代の建物の廃絶後、瓦が下方のこの流路に流れ込んだと考えられる。この流路出土の遺物量は、この試掘調査全体の遺物量の半分以上を占める。Aトレンチではこの層以外からの出土品は非常に少ない。

- Bトレント**：表上より現代の林道補強材である碎石、丸太が検出した。土層は粘土層と砂礫層のほぼ水平互層。
- Cトレント**：粘土層と砂層のほぼ互層。東側ほど層位が小刻みに変移する。
- Dトレント**：南側は岩盤まで浅く、北側で急に深くなる。岩盤には、流路状の落ち込みが見られた。粘土層と砂層の互層。北側では、小刻みに土層が変化する。
- Eトレント(第16回)**：まず旧社務所跡全体を浅く掘ったところ、遺物を含みながら東西に溝状に伸びる黒褐色土が検出されたので、遺構と推定し振り下げたところ、斜め下方(北側)に入り込む不自然な堆積の仕方なので、さらにトレント東端を南北に深掘りした。その結果、南側に、表土下20cm程度で北側に落ち込む岩盤が検出し、その岩盤の上層に炭化物とともに多量の土器を含む黒褐色土層(XI層)が堆積していた。だがこの層は、その北側の殆どを、流路と見られる砂礫層によって切られていたので、上面では南端のみが溝状に残存したものと判明した。Eトレントの遺物の多くが、このXI層から出土している。その殆どが小片の土器で、瓦は少ない。
- Fトレント**：表土下30cm程度で、砂層、砂礫層となる。
- Gトレント**：不規則な黒褐色土の堆積が隨所に見られたが、山上の流出等の堆積物と考えられ、遺構にはならなかった。下層に行くに従い、砂層が主流となる。
- Hトレント**：神社の駐車場跡地。砂礫層が隨所に見られるが、湧水はない。
- Iトレント**：民家跡地。家を建てた時に北側岩盤を相当量削平しており、原地形が損なわれてはいるが、元々岩盤と砂質土の土層と見られる。
- Jトレント**：民家跡地。西側に沢状の落ち込みが見られるが、全体に表土下20cm程度で岩盤もしくは、地山が検出された。
- Kトレント**：神社参道沿いの畑跡地。全体に耕作上の客土があり、その下は地山となる。南の沢側は表土下50~70cmで砂礫層となり、湧水する。
- Lトレント**：神社参道沿いの畑跡地。全体に客土。その下は地山。黒褐色の粘質土と砂礫層の互層。
- Mトレント**：国道沿いの畑跡地。表土下1m程度は耕作用の客土。その下はグライ化した粘土混じりの砂礫層で、湧水著しい。



第16図 H5試掘 A-Eトレンチセクション図



第17図 主なトレンチの土層柱状図 (H5 試掘)

所 見

【土 層】(第17図)

AトレンチVI層、EトレンチXI層を除くと、特異な層位はない。調査区域が、沢に沿った谷状地形に位置するので、殆どのトレンチから湧水し、砂層、砂礫層などの流路痕らしき層が数多く確認された。特にA、Eトレンチには、頗著にU字形に落ち込む沢状の層が確認できた。

その他は、ほぼ自然の水平堆積や客土した耕作土で、遺構は確認されなかった。

【遺 物】(第18~20図)

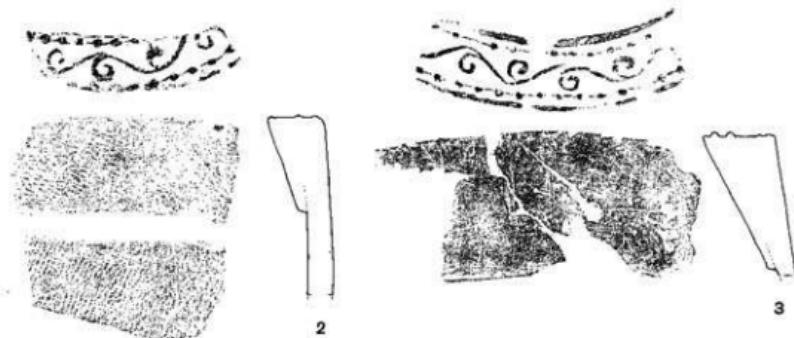
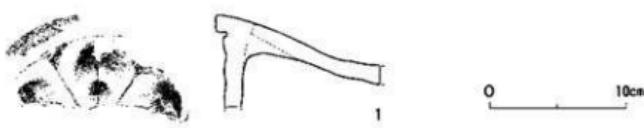
試掘としては遺物の出土量はあったが、遺構に伴うものではなく、すべて流出物と考えられる。

出土した遺物には、瓦、土器等があるが、瓦はAトレンチ、土器はEトレンチから主に出土し、混合で出土することはあまりなかった。これらの遺物の流出元は、瓦は黄金山神社境内の建物址と推定されるが、上器については、この調査では検証できなかった。本調査区域に遺構が存在する可能性は低いので、遺構はすべて失われたか、もしくはその低地には元々遺構はなく黄金山南遺跡が試掘調査区の南方の山地に発見されたので、山の稜線に分布すると推定される遺跡から流出したものとも考えられる。

Aトレンチ出土の軒丸瓦(1)は、破片ではあるが、六弁の重弁蓮華文であり、同トレンチからは、左向きの偏行唐草文の軒平瓦2点(2,3)も出土している。これらはすべて既存の当遺跡出土軒瓦(第18図)と同じ瓦当を呈する。丸・平瓦(第19図)にはいずれもタタキ目と布目がある。

土器は主に、EトレンチXI層からの出土である。図化(第20図)できたものは須恵器だけだが、土師器も出土している。殆どがロクロ成形で底部は回転糸切痕のあるものである。底部にヘラ切痕のあるものは殆どない。多くが壊であるが、壊も少量ある。釘と考えられる鉄製品も1点(18)同層から出土している。

以上の所見より遺物は奈良末~平安初期に比定され、当遺跡の年代とも相応する。



参考
黄金山庵余遺跡出土軒瓦
(県重要文化財)



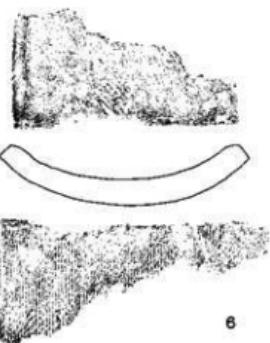
第18図 H5試掘出土遺物(軒瓦)



4



5



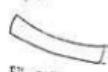
6



7



0 20cm



8

4~6 : Aトレンチ

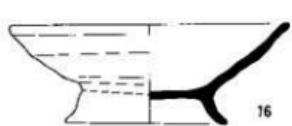
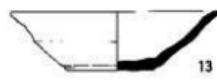
7~8 : Eトレンチ

第19図 H5試掘出土遺物(瓦)

A トレンチ



E トレンチ



0 10cm

第20図 H5 試掘出土遺物（土器他）

黄金川摩金属部出土器物調査表 (H5試掘)

図版NO.	種別	大きさ (cm)		色調		残存状況		成形・調整・削除		出土地点	備考
		(上径) (底径)	(幅) (高)	外面	内面	瓦当面 1/5	上面ケツリ、下面布口	上面ナデ、下面ケツリ	下面ナデ、下面ナデ		
1	軒丸瓦	-	-	灰色	灰色	瓦当面 1/5	上面ケツリ、下面布口	上面ナデ、下面ケツリ	下面ナデ、下面ナデ	A1-1-1-1	六井塙井選鉱文
2	軒平瓦	-	-	淡褐色	淡褐色	瓦当面 1/2	上面ナデ、下面ケツリ	上面ナデ、下面ケツリ	下面ナデ、下面ナデ	A1-1-1-2	篠行吉草文、生焼
3	軒平瓦	-	-	赤褐色	赤褐色	瓦当面 2/3	上面ケツリ後ナデ	上面ケツリ後ナデ	下面ナデ	A1-1-1-3	篠行吉草文、生焼
4	平瓦	-	-	暗灰褐色	暗灰褐色	测定不可能	上面布口、下面ケツリ	上面布口、下面ケツリ	下面ナデ	A1-1-1-4	黒芯あり、やや生焼
5	平瓦	-	-	暗灰色	暗灰色	测定不可能	上面布口、下面ケツリ	上面布口、下面ケツリ	下面ナデ	A1-1-1-5	風化著しい、生焼
6	平瓦	-	26.7	淡褐色	淡褐色	测定不可能	上面ナデ、下面ケツリ	上面ナデ、下面ケツリ	下面ナデ	A1-1-1-6	風化著しい、生焼
7	丸瓦	-	-	褐褐色	褐褐色	测定不可能	上面ナデ、下面ケツリ	上面ナデ、下面ケツリ	下面ナデ	F1-1-1-1	
8	平瓦	-	-	橙褐色	橙褐色	测定不可能	上面ナデ、下面ケツリ	上面ナデ、下面ケツリ	下面ナデ	E1-1-1-2	
9	須恵器环	-	5.7	黄褐色	黄褐色	底部完	クロナデ、外縁下部ケツリ、底部ハーフ切後ナデ	クロナデ、外縁下部ケツリ、底部ハーフ切後ナデ	底部ハーフ切後ナデ	A1-1-1-7	生焼
10	須恵器外	-	7.0	-	黄褐色	底部 1/2	ロクロナデ、外縁下部ケツリ、底部ハーフ切後ナデ	ロクロナデ、外縁下部ケツリ、底部ハーフ切後ナデ	底部ハーフ切後ナデ	A1-1-1-8	生焼
11	須恵器环	11.2	4.5	3.6	淡褐色	口縁 3/4、底部完	ロクロナデ、底部四分之一切痕	ロクロナデ、底部四分之一切痕	底部四分之一切痕	E1-1-1-9	見出側にカーブ状の風化跡付
12	須恵器外	11.0	5.1	2.8	黄褐色	口縁 1/2、底部 1/2	ロクロナデ、底部四分之一切痕	ロクロナデ、底部四分之一切痕	底部四分之一切痕	E1-1-1-10	見出側にカーブ状の風化跡付
13	須恵器环	11.1	4.6	3.2	黄褐色	口縁 1/2、底部完	ロクロナデ、底部四分之一切痕	ロクロナデ、底部四分之一切痕	底部四分之一切痕	E1-1-1-11	見出側にカーブ状の風化跡付
14	須恵器外	16.0	5.3	3.7	赤褐色	口縁 1/2、底部完	ロクロナデ、底部四分之一切痕	ロクロナデ、底部四分之一切痕	底部四分之一切痕	E1-1-1-12	見出側にカーブ状の風化跡付
15	須恵器环	12.6	-	-	黄褐色	口縁 1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	底部四分之一切痕	E1-1-1-13	見出側にカーブ状の風化跡付
16	須恵器外	15.0	8.6	5.4	黄褐色	口縁 5/6、高台 5/6	ロクロナデ、底部四分之一切痕、付高台	ロクロナデ、底部四分之一切痕、付高台	底部四分之一切痕	E1-1-1-14	見出側にカーブ状の風化跡付
17	須恵器环	-	10.3	-	黄褐色	高台、底端完	ロクロナデ	ロクロナデ	底部四分之一切痕	E1-1-1-15	見出側にカーブ状の風化跡付
18	漆(鉢?)	-	-	-	-	-	-	-	両端部欠	E1-1-1-16	

III 調査のまとめ

黄金山産金遺跡は、昭和32年の発掘調査以来35年ぶりの調査となった。今回の調査は、事業用地内に止まつたものの、それは黄金山神社境内と山林を除く、遺跡のほぼ全域にわたつたので、昭和32年の調査と併せると、遺跡の主だった地域は殆ど調査されたことになる。残る山林は稜線付近を除くと崖なので、遺構はないと推定される。

併せて実施された黄金山南遺跡の調査では、黄金山産金遺跡との具体的な関連は見いだせなかつたものの、これまで明らかでなかつた付近一帯の遺跡分布状況に一石を投じることになった。

遺跡の範囲

2度の試掘調査では、現在水田となつてゐる平地は湧水の著しい湿地帯であったことがわかり、調査区内から遺構は発見されなかつた。調査区外についても、その土壤から判断すると、おそらく遺構が発見される可能性は低い。たとえ建物があつたとしても、数多く検出した流路痕から、流されてしまつて残存しないであろう。従つて人々の生活は主に丘陵地に営まれたと考えられる。その痕跡が黄金山南遺跡に残されていた。

黄金山南遺跡は調査範囲も狭く、出土した主な遺構が住居址1軒の小規模な調査だったが、これまで遺跡と確認されていなかつた区域なので、調査の意義は大きい。検出した遺構のみならず、表土に混入していた遺物は、山の上部へ遺跡が続くことを暗示しており、この付近一帯が遺構を伴う遺跡となりうる可能性が高まつた。

このことは、史跡内の試掘調査(平成5年)で出土した、遺構に伴わぬ遺物の出土とも関連してくる問題である。こうした前提を元にすると、これらの遺物は稜線に分布する遺構から流出したものとも推定される。

黄金山産金遺跡では、神社境内以外の周辺の田畠や山林からも遺物が出土することは、地元の人々には知られていた。今回の調査はこのことを初めて学術的に検証したことにもなる。

遺跡の性格

平成5年度に実施された史跡内の試掘調査では、トレントはいずれも神社境内より5~7m低い沢沿いに設定した(図3)。古代の建物址に程近いAトレント最東端の表土下80cmから、多くの瓦を含む流路痕と見られる層が検出した。だが瓦が混入した層は限定されており、これより西側のトレントからは殆ど出土しなかつた。このように非常に限定された瓦の出土状況は、流出先を限定するものでもある。この流路痕は、古代の建物址近くであったことと、两者とも同じ瓦当をもつ軒瓦が発見されていることから、建物址から流出したことに違いあるまい。その層以外のいずれの層からも、瓦の出土が殆どなかつたということは、現在明らかな建物址の西側に続く建物の存在を間接的に

否定することになりうる。従って、瓦葺きの建物はこの1軒のみで、未調査区域(階段より上の神社参道)にもおそらく無いであろうことを何わせる。建物址の西側は昭和32年に調査されているが、遺構、遺物とも特筆すべきものはない(1)。

ただし、瓦葺き以外の建物については追求しえず、再建前の古代の黄金山神社の痕跡は、今回の調査でも確認できなかった。しかし、神社の持つ信仰の性格や、江戸時代の文献等から推測するに、おそらく現位置を大きくはずれていないことはいえるだろう。

沢沿い一帯は、建物も限定された、信仰とむすびついた聖域的意味あいの強いエリアであったと推定される。

一方黄金山南遺跡や、神社社務所跡地のトレンチ出土土器などから、生活エリアはむしろ丘陵上にあることが明らかとなった。

まとめ

現在の発掘調査の殆どが、開発に伴う緊急調査である。本調査もその流れを汲むものであった。従って、最も調査必要な区域とわかっていても手が出せないことも多い。黄金山産金遺跡の場合も全容を明らかにするのであれば、神社境内の徹底調査が本来は望ましい。

今回の調査は、更なる問題を提起することにはなったが、遺跡の確認調査という意味では一段落ついたといえよう。新たに発見された遺跡も含め、この地域一帯の特徴が少しでも明らかになったこと、また事業に伴う開発工事であったものの歴史館及び遺跡公園としての整備であったことなどから、国史跡という意義と、涌谷町の歴史を再認識する契機になったともいえる。

(1)伊東信雄 昭和35年 大平産金遺跡



第21図 わくや万葉の里づくり事業計画図

写真1.
H4 試掘



a.b トレンチ



g トレンチ



k トレンチ



黄金山南遺跡全景（西より）



同 1号住居址

写真3.
黄金山南遺跡
1号住居址



煙道 1.2



壁柱炭化材

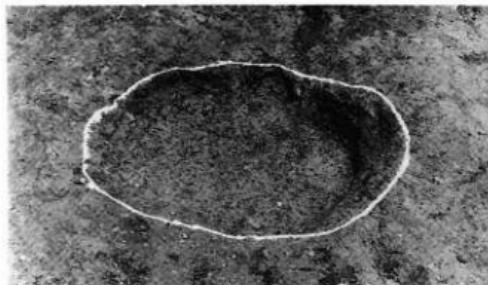


敷 石

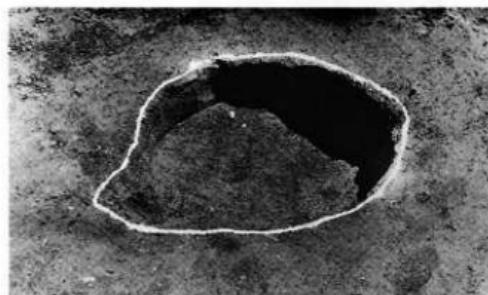


遺物出土状況

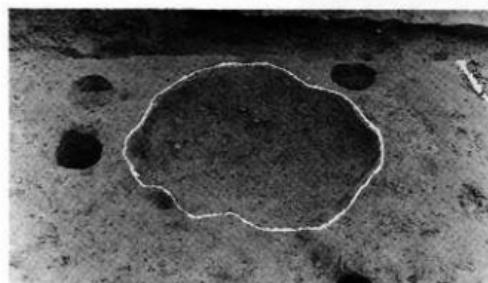
写真4.
黄金山南遺跡



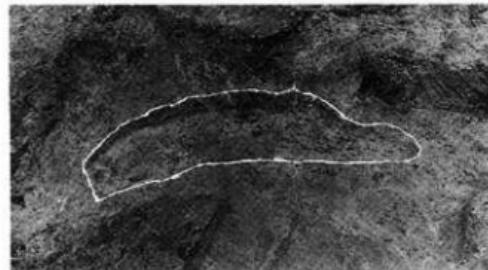
土塙 1



土塙 2



土塙 3



土塙 4

写真5.
黄金山南遺跡



ピット群



焼土痕



調査参加者

写真6.
H5試掘



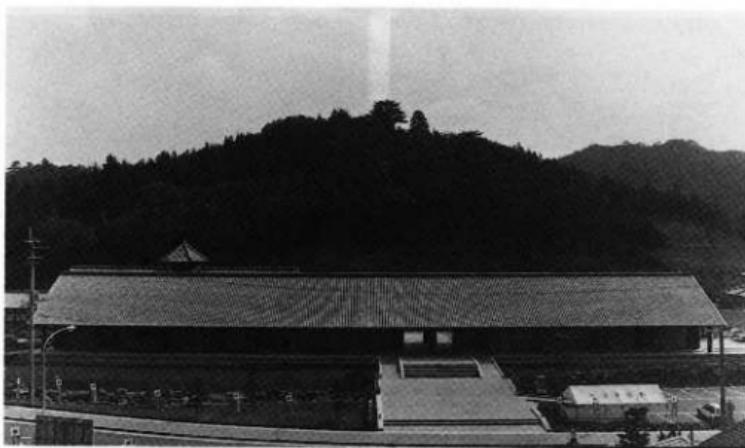
林道



Bトレンチ



Eトレンチ



天平ろまん館全景



遺跡公園

写真7. わくや万葉の里

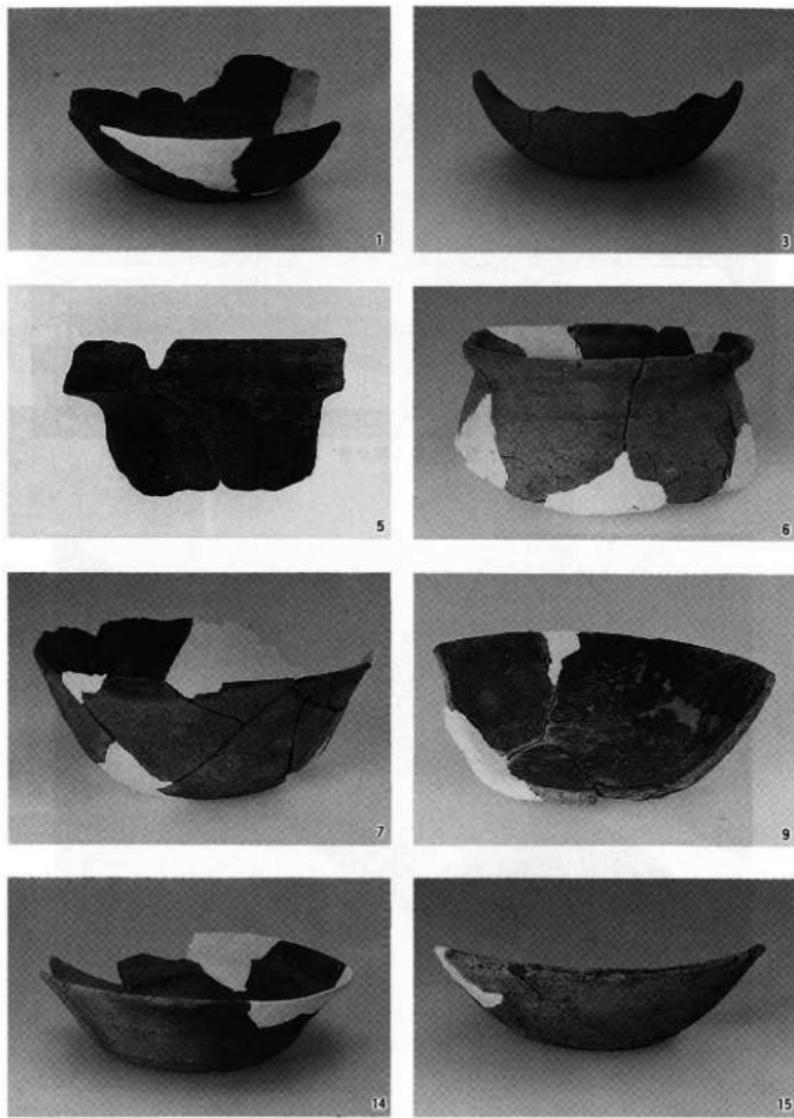


写真8. 黄金山南遺跡出土遺物 (数字は実測図No.)



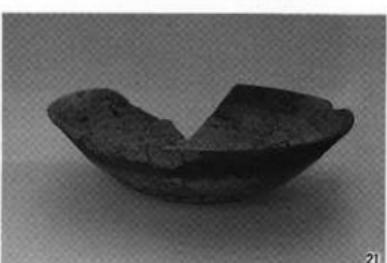
17



18



19



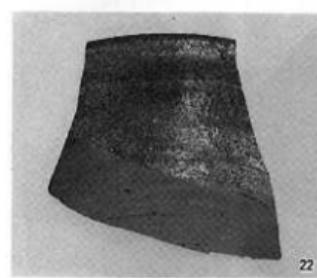
20



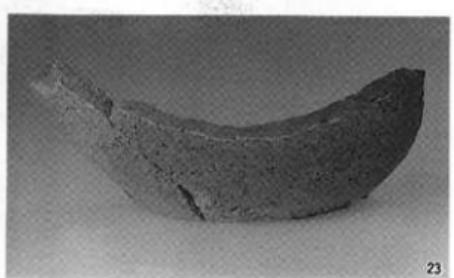
21



200 動植物部分



22



23

写真9. 黄金山南遺跡出土遺物 (数字は実測図No.)

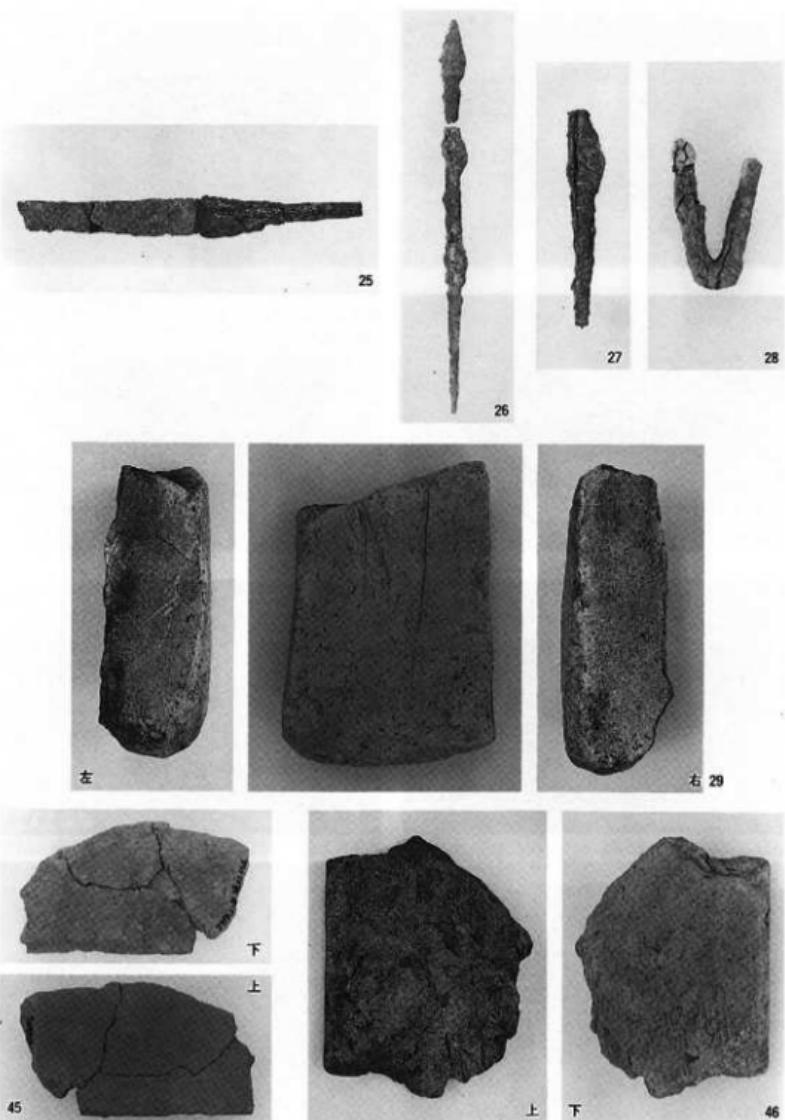
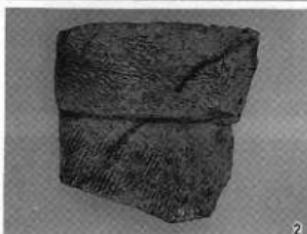
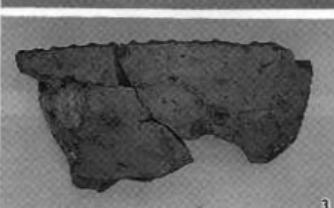


写真10. 黄金山南遺跡出土遺物 (数字は実測図No)



2



3



1

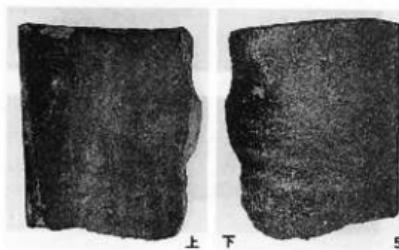


上



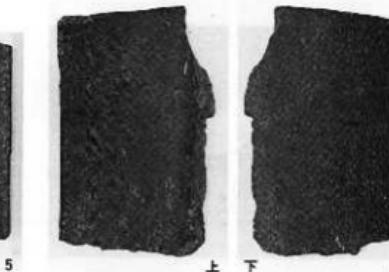
下

5



上

下



上

下

4

写真11. H5 試掘出土遺物 (数字は実測図No.)

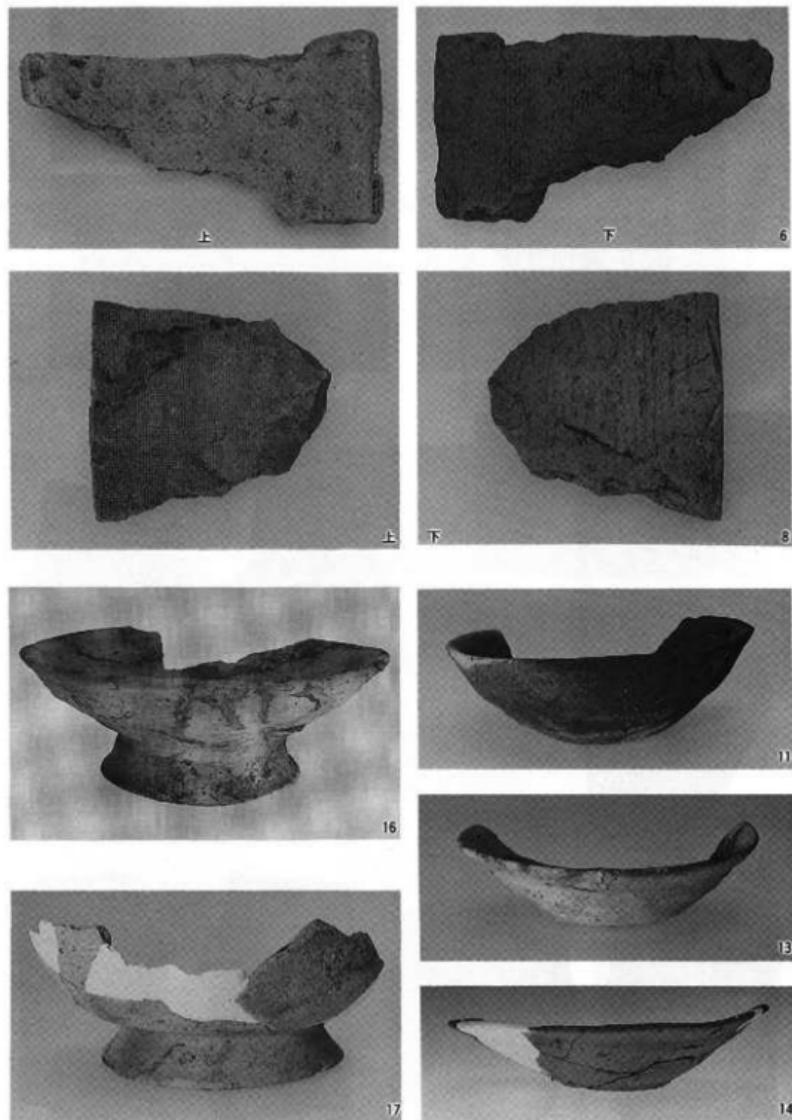


写真12. H5 試掘出土遺物 (数字は実測図 No.)

涌谷町埋蔵文化財調査報告書

黄金山産金遺跡 黄金山南遺跡

—わくや万葉の里づくり事業に伴う発掘調査—

平成8年3月31日

発行 涌谷町教育委員会

〒987-01 宮城県遠田郡涌谷町字新町裏153-2
電話 0229(43)2111

印刷 株式会社 石崎印刷
宮城県涌谷町字六軒町裏76
電話 0229(43)2463

